

【論 文】

富士山と琵琶湖についての言い伝えをめぐって

吉 田 信

- I 江戸・明治期来日の欧米人の紀行文
- II 江戸時代の諸版本、『職原抄』注釈本と写本
- III 俳句、富士山の世界遺産登録

I

大学生向けのある講読用のテキストは、葛飾北斎の『富嶽百景』のうちの「孝霊五年 不二峯出現」と題された一枚を図版として掲げて、以下のような説明を加えている—

According to legend, Mt Fuji and Lake Biwa were formed simultaneously. It is said that the earth hollowed out from the lake was used to create the mound of Mt Fuji in the 5th year of the Emperor Kōrei (286 BC).¹

(言い伝えによると、富士山と琵琶湖は同時に形作られたということである。孝霊天皇の五年目（紀元前 286 年）に、湖から掘り出された土が富士山の盛り上がりを作り出すために使われたと言われている。)

この伝説は日本を訪れた欧米人には興味深い話だったようである。江戸時代に長崎から江戸まで旅をしたドイツ人、エンゲルベルト・ケンペルは、「世界中で非常に高く美しい山、富士山」「円錐形^{えんすい}で左右の形が等しく、堂々としていて、草や木は全く生えていないが、世界中でいちばん美しい山」を称えつつ、こう記している。

[大津の] 町は淡水湖の岸辺にあり、固有の名がなく、ただ「大津の湖」と呼ばれている。この湖水は地震で土地が陥没し水が溜ってできたといわれ、また…富士山はそれと同時

¹ Brian Moeran, *Counter-Orientalism: Japanese Images in British Advertising* (松柏社, 1992), 51 頁。旧字体、くずし字、略字、異体字などに関しては、可能な限り原文に従う。

に高くなったともいう。²

また、同じ行程をとったスウェーデン人のカール・ペーテル・ツェンベリーの旅行記には以下の記述がある—

大津は同名の湖〔琵琶湖〕のほとりにある。湖は非常に細長く、その長さは日本の四〇里もある。古い伝記には、この湖は地震によってわずか一夜にしてできたと伝えられ、その地震下に全地域が沈んだと書かれている。³

時代を下って、この言い伝えへの関心を幕末から明治時代までの主として紀行ものに探ってみると、かなりたくさん記述を見出すことができる。以下の例はもちろん網羅的なものではなく、恣意的な収集によるものである。出版年順に並べてみよう。(引用冒頭に出版年と必要に応じて著者の国籍を記す。)

○〔1863; イギリス人〕伝説によれば、〔富士の〕山自体は一夜のうちに大地の内部から姿を現わして、それと同じ面積の湖〔琵琶湖をさす〕が同じ時刻に京都の近く^{ミヤコ}に現われたとのことだ。⁴

○〔1869〕伝説によれば、この有名な山〔富士山〕は、ナポリ湾のモンテ・ヌオーヴォのように、一夜の噴火によって地球の胎内から生まれ出たのだそうで、その反動として京都付近の地に大きな陥没が起き、一つの湖が生まれたとのことである。⁵

○〔1869-70; デンマーク人〕富士山は休火山で、この前の噴火は一七〇七年だった。語り伝えによれば、この山は一晚にして地上にせり上がり、同時に、その底辺部と同面

² ケンペル 斎藤信 訳『江戸参府旅行日記』(平凡社東洋文庫, 1977), 147-48, 158, 132 頁。この言い伝えへの言及は 1691 年 3 月 2 日の項に出てくる。訳者の「解説」によれば、著者自身の最も古い原稿と甥による写本から編集されたドイツ語版が出たのが著者の歿後 60 年余りたった 1777 年から 79 年にかけてだが、それ以前の 1727 年に遺稿の英訳が、英訳本からの重訳である仏訳本と蘭訳本が 1729 年に出版されたとのことである。

³ C.P. ツェンベリー 高橋文 訳『江戸参府随行記』(1791, 1793; 平凡社東洋文庫, 1994), 136 頁。この旅は 1776 年に行われた。ここには富士山への言及はないが、この点に関しては注の 17 と補注の (3) を参照のこと。

⁴ オールコック 山口光朔 訳『大君の都—幕末日本滞在記—』中(岩波文庫, 1962), 189 頁。

⁵ V.F. アルミニヨン 大久保昭男 訳『イタリア使節の幕末見聞記』(1987; 講談社学術文庫, 2000), 47 頁。この伝説への言及は、1866 年に軍艦の上で伊豆半島の南端から「秀麗な富士山^{フジヤマ}」を見た時の描写の一部に出てくる。

積の湖が京都の近くにでき上がったということだ。⁶

○[1881; イギリス人] According to the legend, the lake was produced by an earthquake in the year 286 B.C., while Fuji rose out of the plains of Suruga at the same moment.

(言い伝えによると、この湖〔琵琶湖〕は紀元前286年に地震によって生れ、その一方で富士が時を同じくして駿河の平野から現れてそびえたということである。)

According to the ancient Japanese legend, for which there is no authority earlier than a book written in (sic) 1652, Fuji arose in a single night, while the Biwa lake near Kiōto was formed simultaneously.

(日本の古い言い伝えによると、1652年に書かれた本以前の典拠はないのだが、富士は一夜にして現れてそびえ立ち、その一方でそれと同時に京都の近くの琵琶湖が出来たということである。)⁷

○[1890; イギリス人] 日本の語り伝えによれば一しかし、このことは西暦一六五二年〔承応元年〕以前には書かれた記録はない—富士山は西暦前三〇〇年ごろ、一晩のうちに地面から隆起し、同時に京都の近くの琵琶湖が沈んだという。これは初期の噴火の結果として、一四〇マイルも離れた琵琶湖ではなくて、山の麓に散在する多くの小さな湖ができたことを附会して言ったものではないだろうか。

…北斎の傑作画集は『富嶽百景』で、彼が七六歳になったときの作品である。その本には、この壮大な山の、あらゆる場所から、あらゆる場合における姿が描かれている。⁸

⁶ エドワード・スエンソン 長島要一 訳『江戸幕末滞在記 若き海軍士官の見た日本』(1989; 講談社学術文庫, 2003), 33頁。この一節は1866年に横浜沖の船上から見た風景描写の中に現れる。

⁷ Ernest Mason Satow and A.G.S. Hawes, *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan...* (Yokohama: Kelly & Co.; Shanghai & Hongkong: Kelly & Walsh, 1881), pp. 89, 110. 最初の引用は“ROUTE 3. THE TŌ-KAI-DŌ FROM TŌKIŌ TO KIŌTO.”の中に、二つ目のそれは“ROUTE 7. FUJI AND ITS NEIGHBOURHOOD.”の中に現れる。以下のサイトを参照のこと—<http://www.froginawell.net/japan/2006/09/google-books-pdf-download-feature/> 併せて補注(1)も参照。

⁸ チェンバレン 高梨健吉 訳『日本事物誌』1 (平凡社東洋文庫, 1969), 248-49頁。これは改訂第6版、最終版(1939)の全訳。初版は1890年だが、筆者は未見。

なお、「バジル・ホール・チェンバレン—Wikipedia」の外部リンク、「チェンバレン著作集(原文)」で調べる限りでは、第2版(1891)の記述は“*Fuji Hyakkei, or Hundred Views of Fusiyama*” (p. 181)となっており、第3版(1898)と邦訳の底本である最終版はこのサイトでは調査不可能であるが、第4版(1902)と第5版(1905)で“*Fuji Hyakkei, or 'Hundred Views of Fuji'*” (それぞれ p. 192 と p. 194)に改められている以外、変更はない。

以下の入手しやすい普及版は、1905年の第5版に拠っており、該当ページは次の通りである—Basil Hall Chamberlain, *Japanese Things Being Notes on Various Subjects Connected with Japan...* (Rutland, Vermont & Tokyo, Japan: Charles E. Tuttle Company, 1971), p. 194; Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese Being Notes on Various Subjects Connected with Japan...* (Berkeley, California: Stone Bridge Press, 2007), pp. 207-8.

○[1891; アメリカ人] 富士ヤマは伝説に包まれ、巡礼たちは躊躇なく信じます。聖なる山は二〇〇〇年前、わずか一晚で生まれ地上にそびえ立ちました。そのとき、西方に大きな窪地が出現し、すぐ水でいっぱいになったのが琵琶湖です。⁹

○[1897] 日本の伝説によれば、紀元前三〇〇年に、ここ [御殿場] から二二〇キロあまり離れた京都近くの琵琶湖が出現した夜と時を同じくして、富士山が忽然として大地の中から盛り上ってきた。この名前は日本語ではなく、アイヌ系言語から派生したことはたしかだ。日本の東北地方でも、多くの場所、山河がアイヌ系言語の古い名前をもっていることからしても、おそらく富士は日本の先住民であるアイヌが崇拝している火の女神フチから変形したものであろう。¹⁰

ラフカディオ・ハーン、小泉八雲は明治 31 年に出版したエッセイ集の中で、この言い伝えがよく知られているという旨を述べている。

○[1898] 富士にまつわる神話や伝説は少なくない。一夜にして地面が盛り上って山ができた話、小さな穴のある宝珠が降り注いだ話、…これらは、しかし、どれももう書物に書かれている。富士について私に書けることと言えば、富士登山の体験談以外、ほとんど残されていないのである。¹¹

この一節にある富士登山もこの時期に訪日した欧米人に人気があった。しかしここでは詳しくは扱わず、注記にとどめる。¹²

⁹ エリザ R. シドモア 外崎克久 訳『シドモア日本紀行 明治の人力車ツアー』（講談社学術文庫、2002）、224-25 頁。1902 年の改訂版の邦訳。

¹⁰ アドルフ・フィッシャー 金森誠也・安藤勉 訳『明治日本印象記 オーストリア人の見た百年前の日本』（1994；講談社学術文庫、2001）、168-69 頁。引用の後半部に出てくる富士山の語源についてはチェンバレンの『事物誌』でかなり詳しく扱われている。「多分、フジは日本語ではないであろう。これはフチ (*Huchi* 或いは *Fuchi*) のくずれた形かも知れない。これはアイヌ語で、火の女神の意味である。」そう述べて、別の語源説を採っている (1.248 頁)。邦訳の底本は、注の 8 で示した通り、最終版の第 6 版 (1939) であるが、第 2 版 (1891) では “the goddess of fire” (p. 180)、第 4 版 (1902) と第 5 版 (1905) で “the Goddess of Fire” (それぞれ p. 191 と p. 193) となっていて、大文字と小文字の違い以外には異同はない。

¹¹ 小泉八雲「富士の山」—平川祐弘 編『明治日本の面影』（講談社学術文庫、1990）、351 頁。“Fuji-no-Yama” はエッセイ集、*Exotics and Retrospectives* (Boston: Little, Brown, and Co., 1898) の巻頭の一章である。ハーンが富士山に登ったのは 1897 年の 8 月下旬で、引用部のあとに登山の様子が詳しく描かれている。

¹² インターネットのサイトを瞥見すると、この種の記事がかなりあるようだ。屋上屋を架すことになりかねないが、補注 (2) として資料を羅列する。

○[1906] 午後に琵琶湖に着いたが、それは「リュート（ギターに似た十七世紀の弦楽器）の湖」という名前の美しい湖であった。この湖は伝説によれば、自然界の大変動によって富士山が百五十マイル先に隆起した時、同時にできたものだとということである。¹³

○[1910] 伝説によれば、富士は一夜にして平野から隆起したのであって、それと同時に百五十マイル離れた土地で大きな陥没があり、そこに水が溜まったのが今の琵琶湖だということである。

この伝説に対する欧米人の関心を 17 世紀末から 20 世紀初めまで辿ってみた。最後の例に加えてもう一つだけ注で例を見るが、あとは語るに任せて、先を急ごう。¹⁴

II

以上のように、細部に少しずつ違いがあるにせよ、類似した記述が繰り返されるには、相互の影響に加えて、元になるものがあるはずだ。まず最初に、補注 (3) で見るように、この伝承への言及としてたびたび取り上げられる二つの文献を改めて見てみよう。先に引用したケンペルのいわゆる『日本誌』とツェンペリーの旅行記は江戸時代に刊行されている。それに先立って浅井了意が『東海道名所記』（1661 年ごろ刊）を著しており、その中に以下の一節が見える—

諺に、むかし、富士権現、近江の地をほりて、富士山をつくりたまひしに、一夜のうちに、つき給へり、夜すであければ、簀かたゝを。爰にすて給ふ。これ三上山なりといふ。さもこそあるらめ
いにしへ、孝霊天皇の御時に、此あふミの水うみ、一夜のうちにきて、その夜に、富

¹³ A.B. ミットフォード 長岡祥三 訳『ミットフォード日本日記 英国貴族の見た明治』（1986；講談社学術文庫, 2001）, 130 頁。この日記は 1906 年 2 月にイギリス国王エドワード 7 世が明治天皇にガーター勲章を奉呈するために使節団を派遣した時に、その首席随員をつとめた著者がつけたものである。

¹⁴ ハーバート・G・ボンティング 長岡祥三 訳『英国人写真家の見た明治日本 この世の楽園・日本』（1988；講談社学術文庫, 2005）, 204 頁。時代がさらに下るが、以下のサイトはイギリスの登山家にして宣教師、ウォルター・ウェストンの『日本アルプス再訪』を引用している—「日本の伝説によれば、この山（富士山）は、孝霊天皇の御代五年目、すなわち紀元前 285 年に、初めて姿を現した。ある夜、近江の国で、大地に非常に大きい裂け目ができて、それが《近江の湖》（琵琶湖）となり、一方、投げ出された土は東北に二五〇キロほど運ばれ、駿河の国に積み上げられて、完璧に均整のとれた円錐型の富士山となったのである」。この署名入りの記事には記載はないが、原著は 1918 年刊で、邦訳に当たると、水野勉 訳、平凡社ライブラリー、1996、77 頁からの引用と判断される。邦訳では「紀元前 285」は「紀元前二八五(ママ)」、「円錐型」は「円錐形」— <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/1/3/1:16&i=19>

じさん
 士山わき出たり。その時しも。三上山も出来にけり。一夜の内に山の出き。淵の出き、
 又ハ山のうつりて、よそにゆく事、物しれる人〜は、ふかき道理のある事也。故なき
 にハあらずと、申されし。¹⁵

引用の後半部に確かに富士山と琵琶湖が孝霊天皇の時代に時を同じくして出現したという記述がある。

もう一つの江戸時代の文献、『和漢三才図会』（1712）からこの言い伝えを記した箇所を引いてみよう。

ふじのやま
 富士山 [は] …伝えによれば、孝霊帝五年に始めて出現した。そもそも一夜のうちに地
 がさけて大湖ができたが、これが江州の琵琶湖で、その土が大山となったのが駿州の富
 士である [国史などにはこの事は載っていない。疑いが無いでもない]。一年中雪があり、絶頂
 には煙がある。江州の三上山は麓からこぼれて出来たものなので、形はほぼ富士に似て
 いる、という。¹⁶

『名所記』からの引用に出てくる「三上山」（別称、近江富士、むかで山）ができた由来はこの記述から分る。しかし、訪日欧米人の旅行記に、地震による土地の陥没、噴火と土地の陥没などの文言が見られるのは、ほかの典拠があつてのことであろう。¹⁷

ところで、富士山―琵琶湖伝説の出てくる、最も古い文献として挙げられてきたのは、補注の (3) に引用したいくつかの例に見られるように、北畠親房が著した『職原抄』（1340）である。はたしてこの有職故実書に伝説への言及はあるのか。書物の性質上、この言い伝えを探し出すのは無理かとも思われるが、その引用がある以上、どこかにその元となるものが

¹⁵ 朝倉治彦 校注『東海道名所記』2（平凡社東洋文庫，1979），100-101 頁。

¹⁶ 寺島良安 著 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳 訳注『和漢三才図会』8（平凡社東洋文庫，1987），54-55 頁。原文は漢文で、訳文中の「琵琶湖」は原文では「琵琶湖」となっている（『和漢三才図会―Wikipedia』の外部リンク、『和漢三才図会』―国立国会図書館のデジタル化資料のコマ番号 223 中の 29 を参照のこと。これは明治 34 [1901] 年の刊行本をデジタル化したものである）。なお、『三才図会』第 11 巻（1988），17-18 頁には次のようである―「孝霊天皇五年六月に富士山がはじめて姿を現した。そもそも江州の湖が一夜に湧出してその土が富士山となったのである。…その頂上には常に煙気があつて、四時いつも雪は消えない。」

¹⁷ 『名所記』の校注者はこの仮名草子の前後に刊行された文献にもこの言い伝えの記述があることを指摘している。「富士が一夜で出現した話は、『下学集』『運歩色葉集』にも見え、流布の世話（諺）で、『和漢三才図会』にも説かれ、『近江輿地志略』にも採られている。『本朝神社考』にはないが、羅山の『孝霊天皇論』には書かれている。」（2.106 頁）つまり『名所記』の前後に刊行された著作にもこの伝説が見られるということである。琵琶湖湛水だけに言及した文献と富士山湧出のみへの言及がある文献、富士山と琵琶湖が同時に出現したという話の最も古い典拠を『職原抄』に求める文献については、更に詳しく補注 (3) で扱う。

あるはずだ。差し当り、「職原抄—古典籍総合データベース—早稲田大学」のサイトが便利そう¹⁸。結論から言えば、『職原抄』そのものはこの言い伝えを取り上げていないようである。言及が見つかったのは、次の四件である—

- (1) 職原抄引事大全. 巻首, 1-9/植木悦^{えつ} 集註
出版書写事項: 万治2 [1659] 山口市郎兵衛, 東洞院通六角下ル町 (京都)
7 HTML/PDF (36.9 MB) 58 カットのうち 28 と 29
- (2) 職原抄引事大全. 巻首, 1-9/植木悦 集註
出版書写事項: 万治2 [1659] 吉田庄左衛門, [京都]
3 HTML/PDF (40.2 MB) 94 カットのうち 64 と 65
- (3) 職原抄. 上, 下, 補遺, 後附/北畠親房 [原著]; [藤原惺窩^{せいこ}] [注]
出版書写事項: 寛文2 [1662] [出版者不明], [出版地不明]
4 HTML/PDF (19.3 MB) 33 カットのうち 2
- (4) 増註職原抄. 巻1-5/北畠親房 述; 於雲子^{おうんし} 改正
出版書写事項: 宝永元 [1704] 跋 [出版者不明], [出版地不明]
4 HTML/PDF (14.7 MB) 33 カットのうち 2

これらの注釈書は記述の詳細に違いがあるとはいえ、内容はほぼ同じである。つまり、スルガの様々な漢字表記の仕方に始まって、ヤマトタケルノミコトが賊徒から難を逃れた話に続いて、以下の記述で締めくくられる。

- (1) (2) 駿河^上…○孝靈帝五年近江湖水始湛^{ヘテ}富士山始涌出ス
- (3) 駿河^上…○孝靈帝五年六月近江、湖水始^テ湛^テ而駿河、富士山始^テ涌出ス
- (4) ①駿河^上…○孝靈帝五年六月近江、湖水始^テ湛^テ而駿河、富士山始^テ涌^キ出ス
(「^{スルガ}駿河^上 ②伊豆^下…」への注記)¹⁹

もう一つ、今度は写本であるが、「京都大学附属図書館蔵 谷村文庫『職原抄』」に以下の記載が見られる。

人王六代孝安 (ママ) 天皇四十四季メニ駿河之富士山涌出ス也…近江…之湖水ハ人王七代孝灵天皇五年之亥 [?] ニ始湛ヘタリ (前半部は「東海道…駿河^上」に、後半部は「東

¹⁸ サイトは以下の通り—

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php?cndbn=%90E%8C%B4%E7%E2>; <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php?cndbn=%90E%8C%B4%8F%B4>

¹⁹ それぞれの引用前半部の記述に関しては補注 (3) の冒頭も併せて参照のこと。

山道…近江大」に付けられた同じページの上欄外注)²⁰

この写本はかなり早い時期に成ったものようだ。というのは末尾近くに書写を終えた—「寫^{〔おわん〕}畢^マ」一年として二つの年号が並んでいるからだ—「職原抄下終 正平二季〔?〕十二月一日…正平五年甲申五月上旬…」。西暦ではそれぞれ 1347 年と 1350 年である。²¹

いずれにしても、富士山—琵琶湖伝説の出所は、官職の沿革を扱った『職原抄』本体ではなく、以上で見た注釈書の類に見出されるようだ。

III

日本文学に現れた富士山を古代から近代まで丹念に辿った久保田淳『富士山の文学』は、第三章、第二節で『東海道名所記』を取り上げて、こう述べている—「この作品での富士山のくぐりには詳しい。…孝霊天皇の五年（西暦紀元前二八六年）に琵琶湖が出来、その土がここに盛り上って富士山となったので、富士禪定（修行として富士登山すること）する者は精進潔斎して登るのだが、…」。²² また、この著書を読み進めてゆくと、さらに興味深い指摘に出会う。与謝蕪村の句を引いて、鋭い分析を行う。

湖へ富士をもどすやさつき雨

「仮名草子」の項でも言及したように、孝霊天皇五年に近江国の大地が裂けて琵琶湖が出来、同時に富士山が出現したという伝説がある。その伝承を踏まえて、このように長梅雨が続くと富士山は出現以前のように琵琶湖に戻ってしまうのではないかと仮想した。現代の我々には突飛としか言いようのない想像である。安永二年（一七七三）六月の作であるという。²³

一方、同じ句に関して高浜虚子は蕪村の見事な腕前に賛辞を呈している。

²⁰ <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/t061/image/2/t061s0057.html> [2, 20/32]

²¹ [2, 30/32]

²² 久保田淳『富士山の文学』（2004；角川ソフィア文庫，2013），133-34 頁。ただし、この著書の筆者がここで言及しているのは、注の 15 に引用した巻五「亀山より山科まで」の一節ではなく、巻二「小田原より江尻まで」の以下の箇所である—「そも〜此山ハ。むかし孝霊天皇即位五年に、近江のみづうミはじめて湛へ。その土こゝにわき出で、この山となりたり。此ゆへに、今の世までも、富士禪定するもの。精進潔斎してのほれども。…」(朝倉治彦校注『東海道名所記』1 [平凡社東洋文庫，1979]，157 頁)

²³ 同上書，144 頁。

この句は主観的の句である。五月雨が或時は^{きみだれ}は^{はげ}烈しい勢で降り、又連日小^こ止みもなく降つてゐるのに対し、山の土を海へおし流すであらうといふだけでは普通の主観だが、蕪村は孝靈天皇五年近江国地^[ママ]圻湖水湛^{こうひ}而富士山出とある口碑を捕へて来て、降り続く五月雨の^たため、其富士山の土を皆おし流して、もとの琵琶湖へ戻してしまうぞといつたのである。理屈も交つてゐる句だが、湖とか富士とか大きなものを捕へて来て、大胆にいひこなした所に、^{あつぱれ}天晴蕪村の^{ぎりやう}技倆が見える。²⁴

ところで、富士山の世界遺産登録にちなんで様々な書籍類が出ているが、「“富士山ブーム、に乗り遅れない」ようにと、登録を間近に控えた時期に出版された本には以下の記述がある。これは先に引用した『和漢三才図会』とともに『東海道名所記』からの引用部の補足となるだろう。

富士山成立に関する伝説「日本一の山と湖」ではつぎのとおり。その昔、日本の神々が集まって、日本一高い山と日本一大きい湖をつくることにした。

神々は日本一高い山をつくる場所を^{するが}駿河国、制限時間を1日と決め、力自慢の神々が^{おうみ}近江国から掘った土をもっこ（土石運搬に用いる道具）に入れて駿河国に運んだ。その土を^も盛って山をつくらうというのだ。

夕方からはじまった山づくりの作業は、明け方近くになって、あとひとつもっこで山が^{とが}でき上がるころまできた。しかし、最後のひとつもっこを時間内に積み上げられなかった。そのため、富士山の山頂は尖った形でなく平らになってしまった。

いっぽう、近江国の土を掘った跡地には日本一大きな琵琶湖ができた。積み上げられなかった最後の一杯の土は、琵琶湖近くにこぼれて近江富士となった。²⁵

以上、今の時代まで語り継がれて伝わる富士山と琵琶湖にまつわる伝説を見てきた。どうやら、話は出発点に戻ったようである。

補注

(1) このハンドブックの初版(1881)と第2版(1884)は、サトウとホーズの共著である。

²⁴ 内藤鳴雪・正岡子規・高浜虚子・河東碧梧桐ほか 佐藤勝明 校注『蕪村句集講義』2 (平凡社東洋文庫, 2011), 150頁。この回の輪講は明治34(1901)年の4月20日に開かれた。校注者による読み下し文は以下の通り—「孝靈天皇五年、近江国ノ地ガ^さ圻ケ湖水湛ヘテ^{しか}而シテ富士山^{いづ}出ル」(166頁)。

²⁵ 博学こだわり倶楽部編『あっぱれ! 富士山 日本一の大雑学』(KAWADE 夢文庫, 2013), 102-3頁。

(第 2 版は庄田元男によって邦訳されている—『明治日本旅行案内』全 3 巻 [平凡社, 1996]。第 2 版では出版社に“London: John Murray”が加わり, “ROUTE 3. THE TŌ-KAI-DŌ FROM TŌKIŌ TO KIŌTO.” 中のこの伝説の記述には変更はないが (p. 80), “ROUTE 7. FUJI AND NEIGHBOURHOOD.” については序文で「…「富士と近郊」の記述は、ほとんど全面的に書き改め、多くの増補を行った。」と述べている。その改訂はこの言い伝えの箇所にも及んでいる。

According to the ancient Japanese legend, of which however there is no earlier record than a native* work written in 1652, Fuji arose in a single night, while the Biwa lake near Kiōto was formed simultaneously. The date assigned to this event by some authors is 301 B.C., and by others 286 B.C., but the whole story is so evidently fabulous that it is scarcely worth while to mention chronology in connection with it. (p. 107)

(日本の古い言い伝えによると、しかし 1652 年にこの国の人が書いたもの以前の記録はないのだが、[初版と同じゆえ、省略]。この出来事が起きたとする年代は、紀元前 301 年とする書き手もいれば、紀元前 286 年とする者もいるが、話全体が明らかに伝説上のものなので、それとの関連で年代について述べることはほとんど価値がない。)

(以上の原文は Satow & Hawes, *A Handbook for Travellers in Japan* で検索— http://books.google.co.jp/books/about/A_Handbook_for_Travellers_in_Central_Nor.html?id=5ZtDAAAAYAAJ&redir_esc=y)

*ここで使われている“native”という語は、次の例に見られる名詞の“native”と同じ含みを持つようだ—“There are but two months in the year, usually July and August, when the mountain is sufficiently free from snow to permit the ascent. So, at least, the natives assert, who go to this snow-capped and cloud-enveloped shrine of their gods in crowds every year” (登ることができるほど [富士の] 山から雪がなくなる月は、年に二か月しかない。たいていは 7 月と 8 月である。ともかくこの国の人たちははっきりとそう言っている、毎年、大勢でこの雪を頂き雲に覆われた霊場に行く人たちは)

(Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan* [New York: The Bradley Company, Publishers, 1863], L340; 仮にこの著書の第 20 章だけをチェックしてみると、この他に pp. 343, 358, 364 で“native”が名詞と形容詞として用いられている— <https://archive.org/stream/capitaloftycoon01alcoiala>; 注の 4 で挙げた邦訳では「原住民 (たち)」[146, 150, 172, 179 頁] となっている。)

さて、第3版は著者と書名を変えて、Basil Hall Chamberlain and W. B. Mason, *A Handbook for Travellers in Japan...* (1891)として第2版を引き継ぐ。そしてこの「『日本旅行案内』は『中部・北部日本旅行案内』に続く第3版として位置づけられている。扉にも「第3版 (Third Edition)」と記されている。」(中野明『グローブ Trotter 世界漫遊家が歩いた明治ニッポン』[朝日新聞出版, 2013], 141頁) 第3版においては富士山・琵琶湖同時出現伝説は, “ROUTE 44. LAKE BIWA.”の項にのみ残り, 以下のようにになっている。

According to a legend long firmly believed in by the Japanese, the lake was produced by an earthquake in the year 286 B.C., while Mount Fuji rose out of the plains of Suruga at the same moment. (New York : Charles Scribner's Sons ; London : John Murray ; Yokohama, Shanghai, Hongkong, Singapore : Kelly & Walsh, Limited, 1893, p. 317 —これは第3版の再刊本である。)

この記述は初版のそれとほぼ同じであり, 第4版(1894)に引き継がれる(p. 328)。第5版(1899)では“believed in, Lake Biwa was produced”(p. 396)に変更。第6版(1901)では次のように改められる—

According to a legend long firmly credited Lake Biwa owed its existence to a great earthquake in the year 286 B.C., while Mount Fuji rose out of the plains of Suruga at the same moment. (p. 394)

これを第7版(1903)は踏襲するが(p. 357), 第8版(1907)では“credited,...the plain”(p. 351)となり, 最終第9版(1913)もこれに従う(p. 344)。

(上記の諸版の引用と情報は, 「バジル・ホール・チェンバレン—Wikipedia」の外部リンク, 「チェンバレン著作集(原文)」から得たものである。)

- (2) 梶山沙織「幕末の外国人富士登山と大宮・村山口」には, 1860年に初代英国公使, オールコック, 1866年にスイス総領事, プレンワルトとアメリカ公使館書記官, ポートマン, 1867年にオランダ総領事, ポルスブルックと英国公使のパークスと夫人が登頂したとある。外国人が珍しかった当時, 大勢の見物人が集まったり, 登山口に当る地域などが宿泊所や食事などの準備といった負担を強いられたとの記述がある(小沢健志・高橋則英 監修『レンズが撮らえた幕末明治の富士山』[山川出版社, 2013], 142-47頁)。

もちろん, 日本人による富士登山・登頂も古くから行われていた。聖徳太子(574-622)が黒駒にまたがって富士山を飛び越える話や, 修験道の祖とされる役行者(7世紀の終りころ)が流刑先の伊豆から抜け出て夜になると富士山に登っていたという言い

伝えは別として、12世紀に^{まつだい}末代上人が何度となく富士登山を繰り返したという記録があり、18世紀からは富士講という信仰集団によって大衆登山とでも言うべきものが盛んに行われた（主に、上垣外憲一『富士山—聖と美の山』[中公新書, 2009], 29-31, 32-33, 55, 142頁）。

また、多くの読者を獲得してきた山岳随筆の中で、深田久弥は富士登山史とこの山への人々の登山願望に触れている。他の名山については自らの登頂体験に伴う細やかな観察や感懐を記しているのだが、こと富士山に限っては自身の登頂に関する記述はなく、この山に対しては愛憎相半ばする感情が交錯しているようである。それはさておき、よく引かれる冒頭に近い箇所を、長さをいとわず、改めて引用する—

…山岳史家マルセル・クルツの書いた『世界登頂年代記』を見ると、富士山は六三三年に^{えん}役ノ^{おづぬ}小角に登頂され、そしてそんな高い山へ登ったのは、これが世界最初となっている。小角の登山は伝説的であるが、しかし平安朝に出た^{みやこのよし}都良香[834-879]の『富士山記』には頂上の噴火口の模様が書いてあるから、もうその頃には誰かが登っていたに違いない。一番早く富士山が人間の到達した最高峰の記録を^た樹てたわけである。しかもこの記録はその後長い間保持され、一五二三年[メキシコの]ポポカテペテル（五四五二^{メートル}米）の登頂まで続いた。約八、九百年もレコードを保っていたことになる。一夏に数万の登山者のあることも世界一だろう。老いも若きも、男も女も、あらゆる階級、あらゆる職業の人々が、「一度は富士登山を」と志す。これほど民衆的な山も^{まれ}稀である。（『日本百名山』[1964；新潮文庫, 1978], 376-77頁。併せて、久保田、前掲書, 30-32頁、上垣外、前掲書, 34-36頁も参照のこと。）

さて、本題に戻って、以下、目についた限りでの外国人の富士登山・登頂の記載を羅列する—

「駐日英国大使（ママ）オールコック卿は、一八六〇年九月の初めに富士登頂を成し遂げた。」（スエンソン、前掲書, 34頁；注の4で挙げた著書の「第二〇章 転地—^{フジヤマ}富士山への巡礼と熱海温泉の訪問」を見よ。）

「昔は、女性は八合目から上へは登ることを許されなかった。パークス夫人が、この山頂に登った最初の女性であった。それは一八六七年〔慶応三年〕一〇月のことであった。」（チェンバレン『事物誌』1, 249頁）

フェルディナンド・フォン・リヒトホーフェンは二度目の来日時の1870年9月13日に山頂に達したことを日記に書き残している。（初来日の1860年当時は、外国人の移動範囲は厳しく制限されていた。）彼も御多分に洩れず、悪天候に悩まされた—「天

候がどんどん悪くなった…。頂上の一〇分いたところで急に雨と霰が降り出した。それは火口の周辺に留まることを不可能にした。私は下山しなければならなかった。」(上村直己 訳『リヒトホーフェン日本滞在記 ドイツ人地理学者の観た幕末明治』[九州大学出版会, 2013], 150 頁)

著名な外交官にしてジャパノロジスト、アーネスト・サトウは、1877 年 7 月と 1882 年 9 月の二度にわたり富士山頂に登った(庄田元男 訳『日本旅行日記』2 [平凡社東洋文庫, 1992], 第 11 章と 136-44 頁)。

オーストリア=ハンガリー帝国の軍人、グスタフ・クライトナーは 1878 年の富士山登頂の体験を、また、1887 年から二年間、明治天皇の宮中に勤務したオットマール・フォン・モールも、富士登山の体験を記録に残している(G. クライトナー 小谷裕幸・森田明 訳『東洋紀行』1 [1881; 平凡社東洋文庫, 1992], 277-82 頁; モール 金森誠也 訳『ドイツ貴族の明治宮廷記』[1904; 1988; 講談社学術文庫, 2011], 239-44 頁)。

さらに、シドモアは自らの富士登山体験を前掲書の「第一七章 富士登山」と「第一八章 富士下山」で詳述している。

アドルフ・フィッシャーは七合目の山小屋まで行って悪天候のため「失敗に終わった富士登山」を経験した(前掲書, 167-76 頁)。

- ポンティングの前掲書の「第七章 富士登山」は、念願が叶った喜びを伝えている。
- (3) 『群書類従』に収められた「本朝皇胤紹運録」は、天皇・皇族の系図を記しており、元は洞院満季が 1426 年に編んだものである。そこには「第七 [代] 孝靈天皇…天皇五年近江國湖水湛始」とある。(塙保己一 編纂『群書類従』第五輯 [1932; 続群書類従完成会, 1987], 4 頁—神代から昭和天皇までの系譜が取り扱われている; 「国立国会図書館デジタルコレクション」— dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539418/24 のコマ番号 60 のうち 6 [この写本は「第九十五 [代] 後醍醐院」(在位 1318-1339) まで扱っている]; 「早稲田古典籍」— http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/nu02/nu02_00757_0001/index.html の 85 カットのうち 8 [こちらは「第百八 [代] 後陽成院」(在位 1586-1611) まで])

いずれも室町時代の国語辞書である『下学集』(1444 年成立)と『運歩色葉集』(1548 年なる)における該当箇所はそれぞれ次の通り—

^{フジサン}富士山 人王才七代孝靈帝、時一夜_ニ從地 [地より] ^{フキ}涌出_ス

(dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2532290 — コマ番号 9/75)

^{フジサン}富士山 人皇才七代孝灵帝善記三年甲辰三月十五日一夜_ニ自地 [地より] 涌出 [ス]

(京都大學文學部國語學國文學研究室 編『元龜二年 京大本 運歩色葉集』[臨

川書店, 1969], 225 頁)

『色葉集』の記述は引用部以外にも『下学集』のそれよりやや詳しいが、前者の出典の一つが後者であるという指摘については、『京大本』に付された「解題」の14-18頁を参照のこと。

『東海道名所記』の校注者が述べているように、『下学集』と『色葉集』のどちらも富士山湧出を述べるのみで、琵琶湖への言及は見当らない。富士山の出現を扱った文献は、物集高見・物集高量が編集した百科事典の中で取り上げられている。主に「富士山の現出」の項を参照（『廣文庫』第十七冊 [1916; 名著普及会, 1977], 465, 467, 469-70 頁）。例えば、江戸時代後期の国語辞書『倭訓栞』^{わくんのしおり}には富士山が「孝靈天皇の時より涌出せりといふハ信ずるにたらず」とある。数多く抜粋された文献のうちで最も古いと思われるものは、北畠親房が著した有職故実書『職原鈔』（1340）である。以下に引用する—

富士山の現出 職原鈔, 下, 二〇三 (孝靈帝五年六月, 近江湖水始湛, 而駿河富士山始涌出,)

『名所記』の注記にはないが、注の14の記事はこの伝説の元を『職原抄』、『名所記』一引用あり—などに辿っている。もちろん、ほかのサイトにもあると思われるが、以下のサイトは『職原抄』、『和漢三才図会』、『東海道名所記』におけるこの言い伝えへの言及を引用している— <http://blogs.yahoo.co.jp/hakusyunetto/11252954.html>

ところで、『職原抄』を「律令下の官職の解説書、有職故実書」と述べる『和歌職原鈔』の校注者は、「解説」で江戸時代に出た版本の比較考証を行った後、以下のようになっている。

以上の版本『職原抄』本文が、いずれも江戸初期刊の古活字版に由来するのに対して、『群書類従』所収の『職原抄』は、系統を異にする本に拠る。それは、前掲『塩尻』が「好シ」とした正平二年十二月一日源顕統の識語「正平二年十二月一日書写之并写点畢 権左中弁兼左近衛少将源顕統」を有する、いわゆる顕統本であった。したがって、類従本は慶長十三年版古活字版以来、版本に必ず付載されていた「補遺」、「追加」および下巻の末尾の「親王」以下を持たない。細部はともかく、版本『職原抄』中、『職原抄』の古態を示す唯一のテキストである。（今西祐一郎 校注『和歌職原鈔一付・版本 職原抄』[平凡社東洋文庫, 2007], 269, 278-79 頁)

『塩尻』は天野信景^{ただかげ}（1663-1733）の著作（同上書, 269 頁）。「正平二年十二月一日…源顕統」は、谷村文庫の写本でも同様であり、その一部については言及済みである。

『類従』に当たってみると、

東海道^{○十五ヶ國}。伊賀^{○下}。伊勢^{○大}。志摩^{○下}。…尾張^{○上}。三河^{○上}。遠江^{○上}。
駿河^{○上}。伊豆^{○下}。…（埜保己一 編纂『群書類従』第五輯，631頁）

といった具合で、富士山—琵琶湖伝説への言及は見当たらない。字体の違いを別にすれば、以下の文献も同様である。

国立国会図書館デジタルコレクション—職原抄 2 卷，1546 年刊

dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2532260 コマ番号 50/63

職原抄—古典籍総合データベース—早稲田大学，1679 年書写

http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/wa03/wa03_06246/wa03_06246_0002/wa03_06246_0002.pdf 2 HTML/PDF (31.1MB) カット 26/88

『和歌職原鈔』慶長 13（1608）年刊古活字版の覆刻，寛永 11（1634）年以前刊，
208-9，142 頁

インターネットのサイトへのアクセスは主に 2013 年 10 月 12 日時点のものである。
る。